

対してクロードは、フォドラ英雄譚という作り話を純粹に楽しんでいる。自分を子供扱いにも等しい形でからかってきていた人間が、子供のように振る舞っている。今日はずいぶんと珍しいものを見ることになっているな、と口元を綻ばせてしまう。

山の一番上を取ると、その本は数段高い位置に保管されているものだった。致し方なし、脚立を運んで元の場所へ納める。

「リシテアはこういった物語、嫌いか？」

ふと、クロードの言葉が投げられる。振り返るが、彼の視線は手元の本にある。自分を見ていないのに、自分に対しての問いをするのはいかなものか。だがもう、彼のそんな態度には苛立つことはない。こういう人間なのだ。

「そうですね……嫌い、と切り捨てるほどではない、とだけ」

リシテアにとって踏み込んでほしくない話題なのかもしれない。そう理解しながら、間を繋ぐための問いだった。そうであった場合、彼女が投げやりに答えてもおどけられるよう、さも興味のない素振りで訊ねてみせた。

そんなことを考えているのだろうと、もう彼の顔を見ずとも分かる。

「私は夢を見るより今を見たいんです」

脚立を恐る恐る下り、次の本へ手を伸ばす。高い所に納めなければならぬ本はまだ何冊かあったはずだから、今手にした本が該当しないことに気付いて溜め息を吐きそうになる。

「今、か……リシテアらしいな」

クロードは本を閉じ、フォドラ英雄譚を棚へ納める。伸びをしながら、リシテアの持ってきた本の山へ近付く。上段三冊を手にとると、周囲を囲む本棚をぐるりと見回す。

「でもこの今って、その先に掛かってくるんだよな」

時々、この男が空恐ろしく感じる時がある。何かを見ているのに、そこにあるものではなく、全く別の物を見ているような。今しがた口にした『その先』だろうか。

「まあリシテアなら、この先は言わなくとも、な？」

またいつもの調子に戻り、ひょうきんに肩を竦めてみせる。自分を認めてくれている相手が、こんなにも期待を寄せている。それに応えずして、なにが仲間だろうか。

「ええ当然。今を死に物狂いで努めないと、明日に進めませんから」